

2019年 TOKYO スタディ・スタヂオ vol.6

「主権者教育はどのように評価すべきか？」



開催日時：2020年2月15日（土）

場所：東海大学代々木キャンパス 2B11 教室

参加者数：19名（+話題提供者・運営メンバー等）

話題提供者： 鵜飼 力也 さん

（国際基督教大学高等学校）

ファシリテーター進行等：別木 萌果 さん

（東京学芸大学4年・学生団体 ivote 副代表）



鵜飼さんによる話題提供

今回の TOKYO スタディ・スタヂオでは、主権者教育の評価のあり方を考えました。最初にファシリテーターの別木さんが、自身の模擬選挙の実践経験などをもとに、主権者教育を通して子どもにどんな力がついたのかを確かめることが難しい、と率直に語ってくれました。その語りを通して皆で問題共有をしました。

その後の鵜飼先生の話提供では、先生が依って立つ評価の考え方や実際の授業事例、鵜飼先生が日々感じている葛藤など、盛り沢山に話題提供頂きました。ここでは2点をピックアップして、ご報告します。

1点目は、鵜飼先生が、「横に座り、引き出す」という評価観を大切にされていたことです。教師が生徒の成績を決めるような評価のイメージではなく、生徒の横に教師が座って話をきき応答するように「やわらかい」評価をする。「学びの個別化」とそれに応じた評価を目指す鵜飼先生は、「大福帳」という生徒と教師の応答ツールと、Google Classroomの機能を併用することで、継続的なフィードバックをし、生徒の理解を保障しようとしておられました。



別木さんによる司会・論点整理

2点目は、生徒自身に評価のあり方を捉え直してもらいたいと強調されていたことです。他者から評価されようがされまいが、「自分で自分を評価する」ことの大切さを生徒に実感してもらいたい。そのために、教師の判断を相対化する工夫を取り入れたり、生徒同士で文章を相互評価する機会も確保したり、「生徒が選ぶ」場面を提供する。その背景には、「序列化のために評価される」意識自体を変革したいという工夫が強く感じられました。先生が設定した評価の基準に疑問を提起してくる生徒の事例を嬉しそうに鵜飼先生が語っておられたのが印象的でした。

授業事例では、新聞の投書文を推敲する授業や、基本的人権に関する判例レポートを作成する授業、政策分析と党首討論を連動させたワークショップ、プロジェクト型の倫理の授業など、多様な事例やその他の参考文献なども御紹介いただきました。

企画の後半では、参加者から個別に出た疑問や感想をもとに、6つのテーマを設定しました。「形成的評価」「自己評価・相互評価」「主権者になる目的」「模擬選挙、出前授業の評価」「評価の具体的方法」など、参加者の興味に合わせて好きなテーマのテーブルに移動して議論をしました。各グループで出た率直な疑問を全体で共有しつつ、鵜飼先生がその都度お答えて頂く場となりました。その中で、鵜飼先生は、主権者として育てたい力として「複雑なものを複雑なまま見られること」「自分の立場をメタ認知できる、言語化できること」を挙げておられました。最後に、「評価は沼である」と同時に、だからこそ教師が重要なのだと語っておられたのが印象的でした。



興味のあるテーマに分かれてディスカッション

今年度の TOKYO スタディ・スタヂオは今回で終了です。次年度も新しい企画を既に構想準備中です。

今後とも、多くの皆様の参加をお待ちしております！！

（Vol.6の主な企画・運営スタッフ：別木萌果・古野香織・小田切瑞生・浜田未貴 報告担当：斉藤仁一郎）